

# 新看護プログラムの浸透を目指した 2年間の取り組みの報告

○秋広 由美子、竹本 修代、竹内 葉子、岸部 友美

自動車事故対策機構 千葉療護センター 看護部

**【はじめに】**自動車事故対策機構（以下NASVA）のプロジェクトである「生活予後診断に基づいた看護プログラム」（以下新看護プログラムと称す）に取り組み2年が経過した。看護部ではこのプログラムの浸透を目標に掲げ、2年目に取り組みの方式を変更した。1年目の取り組みと比較し、方式変更によるプログラム実施経過の変化や課題について検討したことを報告する。

**【方式の変更】**1年目は7人の中心メンバーでプログラムの実践を行った。月2回事例についての検討日を設け、アセスメント・プログラム立案・4週間の実施・評価を行った。2年目は5グループで3事例ずつ実施するスケジュールを組んだ。各グループ2人ずつメンバーを選出し、アセスメント～評価を行った。

**【結果】**1年目は5事例7クール、2年目は13事例14クール実施した。実施に関わった人数は、1年目が7人（全スタッフ数の8%）、2年目は74名（全スタッフ数の80%）であった。アセスメントや評価にかかる時間は2年目の方が長かった。また実施評価として活用したRyugoNursing Program評価表（RNP評価表と称す）では、12事例中9事例で実施前後の点数変化が見られた。

**【考察】**新看護プログラムの実施前は、技術に対する不安や業務への影響などスタッフの懸念が強かった。しかし2年目に実施に関わるスタッフの数が増えたことは、プログラムの理解と患者の変化の共有を容易にする効果が考えられた。しかし関わる頻度は少なかったため、当初の懸念は継続課題である。一方で実施に関わる中で、患者の持てる力に改めて気付く経験もしていた。プログラムの更なる浸透のためには、実施結果のスタッフへのフィードバックの強化や実施過程の整備が必要であると考えられる。